

## 曲のモチーフに関する研究

40期生

### I テーマ設定の理由

音楽における曲のモチーフとは何だろうか？ 曲のモチーフを私達はよく、テーマと曲の内容や、曲想とのイメージのむすびつきによって評価する。例えば、テーマにふさわしい曲だと考える時はその曲が理解できるし、反対にテーマと曲の内容や曲想が不調和な時、わかりにくい曲だと考えるように思う。

辞書（国語辞典）によるとモチーフとは、まず「①芸術で、表現活動の動機（中心思想）」と書いてあった。これは上にのべたテーマと曲の内容や曲想との関係と共通する。つまり上で述べたことは、テーマが曲の中心思想をあらわしていることを前提にした考え方なのである。そして特に音楽については「②楽曲の最も小さい単位で、楽節の基礎となる部分」と書いてあった。さらに『楽典』には「モチーフは、リズム、旋律、和音など全ての要素において、はっきりした特性をそなえており、この発展から楽曲が構成されるのである」とあった。

私は、テーマのイメージと調和するモチーフ（楽曲の基本部分）と、その発展のし方について調べることにする。

### II 研究方法

私が今までに習った曲、知っている曲などについて、テーマとその曲の曲想や内容との関係を調べたら、その関係は、次のおよそ4つに分類できるのでは……？と思った。

- (1) 動物、人間、自然などの具体的な動きや音を表現したもの
- (2) ある特定の共通なストーリーやイメージを持つ物語、詩などに基づいて作られた曲
- (3) 具体的な事、物ではなくて、抽象的な概念や思想、状況などを表現したもの
- (4) 一定の音楽的な形式に合わせて表現されたもの

上に示したように4つのグループに分類した曲の中から適当なものを選んで、考察の対象にする。そして、選んだ曲の譜面を見て、それらの曲のモチーフ、形式、曲想、もり上がり方、和音の使い方、曲の特徴などを各々分析し、グループごとに共通する特徴を導き出すようにする。

### III 研究内容

1. 動物、人間、自然などの具体的な動きや音を表現しようとしたもの

具体的なものを、テーマとして作られた曲の共通な特徴とは何だろうか？ ここでは『朝のかね』（ブルグミュラー）、『かっこう』（ダカン）、『かっこうワルツ』（ジョナソン）、『騎士』（カバレフスキー）、『勇かなな騎士』（シューマン）をとりあげ、分析をす

めていきたい。

#### 例 <分析・その1>

A. 曲名 朝のかね（ブルグミュラー）

概容 朝のすがすがしい感じと、町の中にひびく美しいかねの音を表現している。

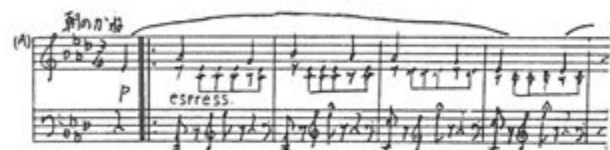
B. 内容 ①小節数…37小節、②速さ…♩=84、③原調…As-dur（変イ長調）

④拍子…4分の3、⑤形式…3部形式（A-B-A'-コーダ）

⑥移調：<A>…As-dur、<B>…Es-dur→f-moll→As-dur、

<A'>…As-dur、<コーダ>…As-dur、⑦モチーフとその発展

〔モチーフと提示部分（A）〕



（Aについて）

Ⓐ 左手が鐘の音を表している。

Ⓑ メロディーは、右手の ♩ ♩ のところ。

Ⓒ ゆったりとした大きなフレーズがある。

〔発展部分（B）〕



（Bについて）

Ⓐ メロディーが二声になった。

Ⓑ この後五小節目から、左手のベースが半音ずつ

上がる。和音も E<sup>b</sup><sub>7</sub>、C<sub>7</sub>、Fm、E<sup>b</sup><sub>7</sub>と移動（＝流れるような感じ）。

Ⓒ 左手の細かいリズムが盛りあげに役立っている。

Ⓓ 和音の特徴とつながり方…和音1つ1つはシンプルだが、コードが経過的に進行するので、流れがとても美しい。これについてはBが良い例である。Bの和音コードは、（5小節目から）E<sup>b</sup><sub>7</sub>…C<sub>7</sub>…Fm…E<sup>b</sup><sub>7</sub>…A<sup>b</sup> D<sup>b</sup>…E<sup>b</sup>…B<sup>b</sup>…E<sup>b</sup>…となっている。A<sup>b</sup>の所（Bのはじめから8小節目）がもりあがりの頂点であると思う。そこまで和音を経過的に進ませるの音を上げていって、それによるメロディーの同型反復など合わせて曲をふくらませていく。この曲の場合、和音の経過によって曲がまとまっているとも言えそうである。

C. 曲想 全体の流れとしては *espress*（表情豊かに、ゆったりと。）

<考察> 最初に示した5曲を1つずつ上のように分析した。その結果、具体的なものを表現した曲の特徴としては、次のようなことが、あげられると思う。

まず、テーマの対象としたもの、「鳥のなき声」「かねの音」「馬のかける音」などが曲の中にそのまま表現されていることである。つまりこのグループの曲には、表現反復性といえるものがあるように思う。

また、A、B、Cの部分とも独特のモチーフを持っていて、独立しているのだが、どこか、イメージの共通な部分がある。つまりA、B、Cがよく影響し合っているのである。これは、対象としているものの観点をかえずに曲が発展していくからだと思う。このようなどころから、このグループの曲の場合、モチーフの発展に連続性があるということも言えそうである。(しかしこの場合、A、B、A'はあくまでも断続している)

では、同じものをテーマの対象とした場合、曲のイメージや曲想には、ちがいが見られないのだろうか？ 例として『かっこう』(ダカン)、『かっこうワルツ』(ジョナソン)について調べることにする。テーマの対象は同じであるが、この2つの曲を聞いてみれば、だれでも、イメージが全くちがうことに気がつくだろう。『かっこう』(ダカン)の方はE-mollで、淋しい暗いかんじの曲で演奏速度も速い。しかし『かっこうワルツ』(ジョナソン)の方は、C-durで明るく楽しいかんじの曲。演奏速度はアンダンテで、そんなに速くない。この曲想のちがいが、かっこう自身によるものでないならば、これは、作曲者の思いついた情景などによるちがいと見てよいだろう。前者の場合、暗い森の中で鳴いている1羽のかっこうを、後者の場合、明るい春の森で鳴いているたくさんのかっこうを表したと考えられる。このように、同じものについて曲を作っても、作曲者の情景のとらえ方のちがいなどによって、曲想も全くかわってしまうのである。

別例として『騎士』(カバレフスキー)、『勇かんな騎手』(シューマン)を見てみる。騎士といえば、だいたい、馬に乗ってかけてくる勇ましい姿を想像する。だから、まわりのちがいによる曲想のちがいというのは少ないだろう。この2つの曲には、「はざれよく快活」という共通点がある。しかし、同じ観点で見られていて、曲想も似ているのに、左手の伴奏の形、和音の使い方は大きくちがう。例えば、伴奏の形だが『騎士』(カバレフスキー)の方は一定のリズムで動くが、『勇かんな騎手』(シューマン)の方はリズムが自由に変化している。和音も、前者の方は特徴的であるが、後者の方はシンプルなものが多い。これは、音楽史の流れを多分にふくんでいるように思う。その曲の作られた時代の音楽性など、音楽史についても考慮しなくてはならない。

## 2. ある特定の共通なストーリーやイメージを持つ物語、詩に基づいて作られたもの。

ストーリーやイメージをテーマとして作られた曲には、どのような特徴があるのだろうか？ ここでは『闘牛士の歌〜カルメンより〜』(ビゼー)、『オペラ、ヘンゼルとグレーテルより、(1幕)さあ、私といっしょに踊りましょう、(2幕)夕べの祈り』(フンパーディング)、『ハンガリア・ラブソディー』(リスト)の曲をとりあげ、分析をすすめていった。

<例> 各曲のモチーフ(『ハンガリア・ラブソディー』はスペースの都合で省く)



●『闘牛士の歌〜カルメンより〜』 ●『オペラ、ヘンゼルとグレーテル 1幕(左)、2幕(右)』

<考察> 以上の3曲を<分析1>のように分析した結果から、このグループの曲の特徴といえるのは、次のことである。まず第1に、組曲のようにいくつもの曲が集まって、1つの曲になっている。例えば、『オペラ・ヘンゼルとグレーテル』(フンパーディング)の場合、第一幕「さあ、私といっしょにおどりましょう」、第二幕「夕べの祈り」……というような曲が集まって、1つのオペラになっている。このグループの曲は、物語に基づいて作られた曲なので、第1幕、第2幕というように、ストーリーの場面ごとに曲もくざられている。だから、場面ごとの曲の曲想とその場面のイメージは共通しており、ちがう場面の曲との間には連続性がないのである。一例として、『オペラ・ヘンゼルとグレーテル』の一幕(「さあ私と一緒に踊りましょう」)と二幕(「夕べの祈り」)の関係を上げることが出来る。このような事から、このグループの曲は、物語性によってモチーフの非連続性を補っているという風に結論づけられる。

ところで、上述の組曲としてのオペラの、その一幕一幕の曲は、どのように特徴づけられるだろうか。それらの曲はテーマ上、①具体的なものを表現した曲(例『四羽の白鳥の踊り—白鳥の湖—』チャイコフスキー)、②抽象的なものを表現した曲(例『情景—白鳥の湖—』同上)、そして③形式を重んじて作られた曲、のいずれかであると考えられる。つまりこのグループの曲は、研究方法のところで触れた(1)、(3)、(4)のグループの曲が、いくつも集まって出来た曲とみなすことが出来る。従って場面ごとの一曲一曲に関しては、テーマによって(1)、(3)、(4)に分類可能な、それぞれの特徴を持っているのである。

## 3. 抽象的な概念や思想、状況などを表現しようとしたもの

抽象的なものをテーマとした曲には、どのような特徴があるだろうか？ ここでは、『わかれ』(ブルグミュラー)、『子守歌』(ブルグミュラー)、『子守歌』(カバレフスキー)をとりあげ、分析を進めた。

<例> 各曲のモチーフ



●わかれ(ブルグミュラー)



●子守歌(ブルグミュラー)



●子守歌(カバレフスキー)

<考察> 以上3曲を分析した結果、このグループの曲は、次のように特徴づけられる。まず、このグループの曲には連続性があるといえる。例えば『わかれ』(ブルグミュラー)

の場合、三部形式で、AがEs-durなのに対しBはc-mollで、平行調になっている。しかし、右手が分散和音で、左手がメロディーという、基本構成はかわっていない。ただ、右手の和音の一番上の音が、第2メロディーになった。これは、曲が発展して、ふくらんできたからだと考えられるだろう。『子守歌』（カバレフスキー）は、一部形式である。15小節目で、左手がメロディー、右手が奏となるだけで、曲のイメージや調子は、ほとんどかわらない。『子守歌』（ブルグミュラー）も同じように影響し合っていた。一部形式はもとより、三部形式における形式上の各部分（A, B, A'）も、表現しようとする曲想からみると、断続しているというよりも、むしろ発展的に連続しており、各々ははっきりわかれていないように思われる。

また、これらの曲は、抽象的な思想をテーマとして、モチーフを発展させているため、形式について、作曲者の感情などがあらわになっている。このグループの曲の2つ目の特徴として、感情性があるということも言えそうである。

#### 4. 一定の音楽的な形式に合わせて表現したもの

一定の音楽的な形式に合わせて表現された曲は、どのように特徴づけられるだろう。ここでは『ソナチネOp. 20, No. 1-3楽章』（クーラウ）と『ソナチネOp. 55, No. 1-2楽章』（クーラウ）、『ワルツ』（シューベルト）をとりあげた。

<例> 各曲のモチーフ



• ソナチネOp. 20, No. 1-3楽章

<考察> これら3曲を分析した結果から、このグループの曲に共通する特徴とは、次のことである。まず、このグループの曲は2つにわけられる。1つ目のグループは「ソナタ」など、2つ目のグループは「ワルツ」「マーチ」などのものである。前者も、後者も、形式に基づいて作られている。つまり、形式性があるという面では共通している。しかし、後者の方は、行進、おどりなどを前提とした曲であるから、子守歌などの(3)のグループとも、とても接近した関係をもっている。前者の方は、表現するものより、形式に忠実に作られているため、思想性がない。だから、この場合のモチーフというのは、曲の中心思想をあらわすのではなく、単に旋律の基本部分というだけの役割しかしないのである。また、ソナタなどは、楽章ごとに区切られているため、楽章ごとのモチーフにつながりはない。

#### IV 結論

今まで、各々の曲を4つのグループに分類し、この研究をすすめてきた。これらの曲を、各グループごとの考察から考えて①「モチーフの発展に連続性があるか、ないか」②「モチ

フ（テーマ）の対象となったものが、具体的か、抽象的か」という2つの観点から検討した。それを図として表したのが、<図1>である。「モチーフの発展に連続性があるかどうか」ということについては、(1), (3)のグループにはあるが、(2), (4)のグループにはない。また、「テーマの対象が具体的か、抽象的か」ということについては、(1), (2)は具体的だが、(3), (4)は抽象的である。その他に(1)のグループの曲は、表現反復性、(2)のグループの曲には物語性、(3)のグループの曲には感情性、(4)のグループの曲には形式性があることがわかった。



#### V 感想、反省

今までも、音楽は大好きだったが、単に、言われた曲を練習するくらいのものであったので、今回の研究ができた事自体、私自身の勉強になったと思う。それに、曲の発展についても、私なりにいろいろと調べられておもしろかった。ただ反省としては、研究材料が小品にかたよりすぎた（大曲になると分析ができないため）ので、考察にも、少し無理があったような気がする。また、この研究の場合(1)のところでも少しのべたが、音楽史も考慮すべきだったと思う。今後、このようなことも、きちんと身につけた上で研究をすすめて行きたいと思う。